禿了滉先生を偲んで

学園長先生との思い出を同窓生の方々に寄稿していただきました。

禿 了滉先生を偲んで

昭和43年度卒業
保育科
宮永百合子
（旧姓 横式）

平成27年10月に学園長室を訪れた折のこと、先生と握手をしたまま、
♪我らは仏の子どもなり。嬉しい時も悲しい時もみ親の袖にすがりなん♪
このように幼き頃の歌を一緒に唄ったのも思い出の一つです。室内は笑顔でいっぱい！声もお元気だし、指も長くて柔らかくて･･･優しい心が伝わってきて、涙があふれんばかりでした。

禿先生から仁愛学園創立120周年記念の折には、一日一日をみ佛の浄土を目指しつつ68年間の在職に感謝していることなど伺うことが出来ました。

そして、手元の画紙に”皆様のご健勝ご活躍を念じています。合掌”と書いていただき、卒業生の私は感謝の気持ちでいっぱいになったのを昨日のことのように思い出します。

つながりあって かがやいて

平成14年度卒業
幼児教育学科教育情報コース
木下奈々美

仁愛附属幼稚園に勤務し、私は子どもたちと共に学園長先生からたくさんのお話をお聞きすることができました。園舎を入ってすぐに、いのちとひかりのホールがあります。そこには「つながりあって　かがやいて」という言葉が書かれています。ここを通る度に、「四恩（親、祖先･人々･自然･仏さま）によって限りなく生かされているご恩に気づき、ありがとうの心を基盤に、みんなで仲良く、にこにこ元気で過ごしましょう。」と言われた学園長先生の優しい声と笑顔が思い出され、温かい気持ちになります。これからも、この思いを子どもたちや職員と共有し、いつまでも学園長先生とつながりあっていたいと思います。

学園長先生を偲んで

昭和43年度卒業
家政科
岩木弥惠子
（旧姓 谷本）

いつもお元気でかくしゃくとされていた学園長先生の訃報を知り驚きました。同窓会でお会いする時は、いつもにこにこと笑みを浮かべておられ、笑顔の学園長先生しか思い出せません。卒業後の同窓会での関わりの中で、思い出は多くありますが「子育ては手をかけ過ぎてはだめですよ」と言われたことが最も記憶に残っています。幼い孫の相手をしていてつい手をかけ過ぎた時、学園長先生の教えが思い出されます。

これまでのご指導に感謝するとともに、学園長先生のご冥福を心からお祈りいたします。

禿 了滉先生を偲んで

昭和49年度卒業
児童教育学科 幼児教育専攻
寺崎美智江
（旧姓 吉田）

思い返せば、昭和49年の3月、仁愛保育園の落成式と祝賀会が保育園のホールで行われた日のことです。短大を卒業したばかりで何もわからない私は、胸をどきどきさせながら先生のもとへ挨拶にいくと、「これから大変だと思うけどお願いしますねー。」とにこにこしながらおしゃって下さいました。私にとって、それが先生から頂いた初めてのことばでした。

そして、昨年の仁短祭の日、私が制作した作品の前で、「いいことしているねー。」と声をかけてくださったのが最後のことばでした。

46 年間、私は先生のことばに支えられ育てて頂きました。ありがとうございました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

励ましのお言葉

昭和47年度卒業
児童教育科保育コース
大久保郁子（旧姓 佐藤）

学生時代の２年間、附属幼稚園勤務の７年間、非常勤講師として現在に至る約30年間の計50年間、先生はお会いするたびに「元気だね」「いつも頑張っているね」と、片手をあげてニッコリ笑顔でお声かけくださいました。そのお姿を今懐かしく思い出しております。

その中でも一つ心に留めている言葉があります。幼稚園勤務間もないころ、他園での研究大会の館内放送の役割での出来事です。放送を間違え、「失礼しました」と言い直して放送したことがありました。先生は大会視察を終えて帰られる時、「放送良かったよ。でも、失礼しましたと言い直しをしなくても済むように出来るといいネ！」とお言葉をかけて下さいました。このお言葉を私は、「今できることを精一杯行い、悔いのない人生を歩め」と受取り今でも大切に守っております。厳しさの中に温かいエールをいつも下さる素晴らしい先生でした。

禿 了滉先生を偲んで

昭和58年度卒業
児童教育学科 幼児教育専攻
龍谿志穂美
（旧姓 島田）

「卒業したらちゃんと富山に戻りなさいよ。」

これは学園長先生（当時学長）が、六和寮をたずねてくださる度に、寮生であった私にかけてくださった言葉でした。当時はそれを少し面倒にも思ったものですが、今思えばそれは子を心配する親心そのものであったと身に沁みています。

結局私は言いつけを破り、仁愛短大勤務の龍谿と結婚することになったのですが、学園長先生は大変喜んでくださいました。何年に一度かお会いすると、私には夫の仕事ぶりを褒めてくださり、また夫には私の仕事ぶりを褒めてくださっていたようです。

これが学園長先生と私との小さな関わりですが、人の心を温かくする大きな存在として、今でも私の心に根付いています。

卒業生はいま…

置かれた場所で咲きなさい

昭和52年度卒業　児童教育学科幼児教育専攻
岩田　喜代美（はちまんこども園）

還暦を迎える頃、「置かれた場所で咲きなさい」という本を手にしました。咲くということは、諦めるのではなく、笑顔で生き、周囲の人々も幸せにすること。置かれた自分の居場所で自分なりの花を咲かせようと心に留めました。今までとは違った花を咲かせて楽しもうと、気分は上昇しました。

保育現場在職を継続させてもらいながら、「やってみたいこと」を静かに始めています。

今年は、コロナウイルス感染の影響で、園は登園自粛の協力をお願いしました。休園はせず、まず密を避けることを考慮しドキドキしながらの毎日です。自宅待機の子どもたちに、体操、歌、絵本などの動画配信をしました。作成チームの仲間に入れてもらい、集団の一員である心地よさと、若い保育者のデジタル機器の扱いに脱帽でした。

一方、洋裁に花を咲かせています。私には苦手、無理、下手だと思っていましたが、「やってみたい」が後押ししました。幸い作りたい物を丁寧に教えてくださる教室に出会いました。布を選ぶ、組み合わせる、型紙をつくる、ミシンを買うと新鮮なことばかりでした。袋物、コースター、バック、チュニック、ワンピースと少しずつですが腕を上げている錯覚に満足しています。この教室は、仁愛短大時代の友人の紹介で短大での出会いと絆が今の私の人生を楽しませてくれるひとつになっていると感じています。

そして、花を増やしていくには、今までの概念を捨てることだとわかりました。料理は下手ではないかもしれない、犬は嫌いじゃないかもしれない（犬が怖い）ピアノは、運動は、と自分の弱いところをもしかしたら、自分の思い違いだったかも…と「やってみよう」「なかなかやれるじゃない」につなげることと張り切っています。

新しい時代へ

平成6年度卒業 生活科学学科栄養管理コース
川口　智絵

きっかけは友達の一言だった。「管理栄養士になりたいから、栄養管理コースに行く」その時の私は軽い気持ちで、じゃあ私も栄養士コースにしようかなと決めた。特に大きな夢があった訳でもなかった。何となく選んだ栄養という道をこれ程長く歩んで来られたのは、学生時代に栄養学の楽しさを知ったことが大きい。

卒業後は病院へ就職し、臨床栄養の勉強に没頭した。その後病院に老人保健施設が併設され、高齢者の食事や認知症、嚥下食について勉強した。その時々で栄養の各分野を勉強してきたが、これでいいのかと何年も悩んだ時期もあった。施設で出会ったコーヒーが好きな入所者は、奥さんと行った喫茶店でコーヒーが飲みたいと言っていた。そのお店には行けないけれど、今度施設内カフェで私と一緒に好きなコーヒーを飲みましょうねと笑顔で別れ、結局一緒に飲めなかった。医療・介護の各分野でそれぞれの栄養を経験し、今は不思議と専門分野や各論にこだわらず、広く自由に患者さんや利用者と関わりたいと思えるようになった。

そんな中、２月の終わりから新型コロナウィルスが猛威を振るいだし、福井県でも感染者が増えていった。私の働いている病院・老人保健施設でも新型コロナウィルスの対応に毎日追われている。病院前では検温、面会制限が行われ、オンライン面会となった。病院や施設でも新しい生活様式への変化が求められた。私はこのコロナ禍で食事と免疫、非接触型の食支援について考えるようになっている。そして、学生時代に最初に学んだ「食べることは全ての命の源である」という原点に立ち返って日々向き合っている。

今後も激変する環境の変化に対して、自分にできる食の道を自分なりに続けていこうと思っている。私は今、次の新たな時代に向けて一歩ずつ進んでいる。